

「川越まちづくり」の物語描写研究* — 伝建地区指定に至るまちづくり史 —

Description of narratives on “Kawagoe city planning”:
History of city planning to designation of the preservation district*

澤崎貴則**・藤井聡***・羽鳥剛史****・長谷川大貴*****

By Takanori SAWASAKI**, Satoshi FUJII***, Tsuyoshi HATORI****, Daiki HASEGAWA*****

1. 研究の背景と目的

近年、大都市への集中やモータリゼーションの進展等を背景として、多くの都市において中心市街地の活力低下が問題となっている。そうした中、住民自らが考え、行政等に働きかけ、活気を取り戻すというような「まちづくり」の成功事例もいくつか報告されている。こうした成功事例において「如何にしてその成功が導かれたのか」という一般的な知見を得ることは、様々な地域における今後のまちづくりの取り組みを成功へと導く上で、有益であると期待される。

さてここで、そうしたまちづくりの成功事例について一般的な知見を得る典型的な方法として「自然科学的方法論」がある。この方法論では、1 つや 2 つではなく、様々な成功事例をデータとして網羅的に収集し、それらを総合的に（場合によっては統計的に）分析することを通じて一般的な知見を抽出するという手続きが必要となる。そして、そこから得られる一般的了解とは、「まちづくりの成功を導くメカニズム」と、そのメカニズムより示唆される「まちづくりの成功を“結果”として導く“原因”」である。しかしながら「自然科学」の対象は一般に、天体や物質等の「非精神的」なものである。それ故、そうした方法論が「精神的」なものに対して採用できるか否かについては、議論の分かれるところである。

一方で、哲学の一領域である「解釈学」では、人間精神を理解する上で必要なのは「因果関係」ではなく「解釈」である、ということが主張されている。この解釈学ではまず、一切の人間精神の産物を「経験の表現」として捉える。そして、その経験の表現を通じてその背後にある“人間精神”について何かを理解するためには、その経験の表現に対する“解釈”が不可欠であるという立場に立つ。例えばデールタイは、経験とは、思考や行為とは異なり、環境、目的、手段、意図を包括的に含んでいる、と指摘している。そして、その経験についての語られる言説、あるいは“物語”（narrative）を“解

釈”することを通じて、その経験に含まれる環境や目的、手段、意図などが包括的に了解されるということが論ぜられている。さらに、そうした解釈において重要となるのは、その言説や物語に対して“自己移入”を行い、「その物語の中を生きる」事なのだと主張されている。そうすることではじめて、語り手の思考や感情のみならず、彼等が意識していない深い精神的な事柄までも取り出す事が可能となるのである¹⁾。

また、価値観や信念を含む個々人のアイデンティティは所属するコミュニティ内での“共有された物語”の影響を受ける事が指摘されている。そして、コミュニティ内における“共有された物語”もまた、個々人の語る“物語”に影響を受ける事が指摘されている²⁾。そのため、コミュニティにおける様々な活動に関する知見を得る為には、コミュニティ内で活動する人々の“物語”を集積・解釈し、地域の“共有された物語”について理解を深める事が必要不可欠であると考えられる。実際、地域の“物語”を集積し“共有された物語”を抽出し、地域の将来像を描く一助にしようとする研究もなされている³⁾。さらには、“物語”を聞くことによって、さもすれば伝承されず消えてしまうような過去の重要な出来事に関する知見を得る事が可能となるのである⁴⁾。

こうした「解釈学的方法論」は、一つの一般的了解を抽出するにあたって、先述の「自然科学的方法論」とは異なり、必ずしも多様な事例を包括的に分析することを要請しない。むしろ、包括的分析を拒絶し、徹底的に特定の一つの経験、あるいはその表現の解釈を試みることを通じて、一般的了解を得ようとする。なぜなら、一人の人間が同時に複数の人生を生きることが不可能であり、いずれの時点においても一人の人生をしか生き得ないのと同様に、デールタイが言うように自己移入を行い、その中を生きることができる物語は、それぞれの時点においては特定のものに限定しなければならないからである⁵⁾。それ故、まちづくりの成功事例について解釈学的方法論によって一般的了解を得るためには、特定のまちづくり事例を選定することが必然的に求められる。

以上の議論に基づいて、まちづくり成功事例として、様々な文献で、あるいは専門家からも取り上げられることが多い埼玉県川越市を選定する。そして、川越のまちづくりに関わった様々な関係者へのインタビューを通じ

*キーワード：計画基礎論，物語

**学生員，京都大学大学院工学研究科

(京都府京都市西京区京都大学桂4 C1-2-437，

TEL075-383-3242，E-mail:sawasaki@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

***正員，工博，京都大学大学院工学研究科

****正員，工博，東京工業大学大学院理工学研究科

*****学生員，京都大学大学院工学研究科

て、まちづくりに関する“物語”を収集し、それらの物語をつなぎ合わせるという形の著者らの解釈行為を経ることで、「川越まちづくり」の物語を改めて構成する事を試みる。本稿ではこうした解釈学的方法論に基づいてまちづくりについての一般的了解を得ることを研究目的とする。

こうしたまちづくりの成功事例についての物語的記述は、それを読了することを通じ、自己移入による追体験によって、住民達がそのまちづくりに付与した思いや、問題に直面した際に感じた葛藤、そしてそれを乗り越えていく決然たる意志など、住民達の人間精神を理解し、疑似体験する事が可能となると期待できる。そして、このような体験を通して、民俗学で指摘されているように、人々が自発的に地域に資する行動をとる傾向を促進することが可能となるとも期待される⁵⁾。

2. 川越のまちづくりの概要

川越市は現在、人口約 34 万人の中核都市であるとともに、「小江戸」と呼ばれる観光地でもある。この町には昔から商業地として栄えた一番街通りがあり、その通りの両端に古くから残る蔵造りの町並みが広がり、国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも指定されている。この蔵造りの町並みを保全していく活動がこれまで盛んに行われてきた。1983 年に市民団体「川越蔵の会」が設立され、中小企業庁によるコミュニティ・マート構想による事業調査を行った。この調査に基づいて、1987 年には「町並み委員会」が組織され、独自に「町づくり規範」という自主規制を作成し、その後、一番街通りの電線地中化が行われる等、町の景観を良くしようと努力がなされてきた⁶⁾。こうした活動が功を奏し、観光客は年々増加し、1989 年は 338 万人であった観光客数が 2009 年には 627 万人にまで増加している⁷⁾。

3. 川越まちづくりの物語描写に向けて

(1) それぞれの視点からの物語描写と、 その横断的再解釈

こうした川越まちづくりの事実的な経緯は、それを解釈するにあたって重要な情報を提供しうるものであるが、それをいくら積み重ねてみても、それだけでは必ずしもまちづくりの実態を表現することはできない⁸⁾。第 1 章で述べた解釈学的論考のように、まちづくりというものを理解するためには、“物語”を構成し、整理することが必要である。

ただし、物語には幾重の“視点”が存在しうる⁹⁾。そして“まちづくり”の物語には、様々な人々に関わるものであり、その物語の視点の多様性、重層性は、とりわ

け大きなものとなる。については本研究では、川越まちづくりに実際に関わった人々から直接間接に伺ったお話を基に、著者らが、川越まちづくりの展開の中でとりわけ重要な、互いに異なる役割を担ってこられたと感じた方々を取り上げることとした。そして、その方々の視点からの、それぞれの「川越のまちづくりの物語」についてお話を伺い、その上で、改めて著者らの立場から描写することとしたい。そうした個別の物語は、それぞれの人々にとっての「川越まちづくり」に対する個別解釈と言いうるものであるが、その個別解釈を、著者らの立場から改めて“再解釈”をすることを通じて、それぞれについて描写していくこととしたい。

さらに本研究では、そうしたそれぞれの個別の物語を横断的に“再解釈”することを通じて、“まちづくり”の展開に資する、より一般的な了解を得ることとしたい。

(2) 川越まちづくりを支えた四つの役割

筆者らは、川越まちづくりの物語描写を行うにあたって、まずは川越市役所の方々に、川越まちづくりについて、どの方にお話をお伺いするとよろしいかという点を尋ねたところ、異口同音に二人の人物の名が挙げられた。一人が川越のまちの象徴的存在である「蔵」の保存とそれを活用したまちづくりに尽力してきた“町衆”の一人、可児一男氏（カニヤ本店社長）であった。そしてもう一名は、川越の“町衆”であると共に、市役所職員として、川越まちづくりに尽力してきた植松久夫氏（川越市役所広報監）であった。

この御両名は、川越のまちに住まう直接の“部内者”として、それぞれ“民”と“官”という役割を担いつつ川越まちづくりを進めた中心的な人物であったが、この御両名に加えて、川越まちづくりの展開の中で、重要な役割を担った、もう二名の名前が浮かび上がった。その二名の方々はいずれも、川越に住まう部内者ではなく、川越外に住む“部外者”であるが、川越のまちづくりの展開にあたって、それぞれ異なった“専門”の立場から、非常に重要な役割を担った方々であった。

一人は、“まちづくりの専門家”として、蔵の町並みの保存と整備のために様々な知的刺激を提供し続けた福川裕一氏（千葉大学大学院自然科学研究科教授）であった。そしてもう一名が、川越の町並みの中心軸を形成している“道路”と、その道路それを含めた“都市計画”の専門家である佐々木政雄氏（株式会社アトリエ 74 建築都市計画研究所代表取締役）であった。福川氏は、川越まちづくりを語る上で欠かせない「町づくり規範」の策定と運営にあたって極めて重要な役割を担った専門家である一方で、佐々木氏は、同じく川越まちづくりを語る上で欠かせない「伝統的建造物群保存地区（伝建地区）指定」において決定的に重要な役割を担った、

道路交通や都市計画に関する専門家であった。

言うまでもなく、川越まちづくりに、以上に述べた四名以外にも実に様々な方々が関わりながら進展してきたものであるが、以上の四名は、川越まちづくりの展開にあたって欠くべからざる四つの役割を担った人々であった。その四つの役割とは、官（植松氏）と民（可児氏）の立場からまちづくりを支えた“川越の内部の二つの役割”と、その川越まちづくりを“まちづくり専門家”（福川氏）として、そして“道路・都市計画の専門家”（佐々木氏）として支援した“川越の外部の二つの役割”である。

それでは、川越まちづくりにおいてこの部内・部外の四つの役割をそれぞれの立場で担った四人の方々から伺った話を基に、それぞれの立場からの“川越まちづくりの物語”を描写していくこととしたい。

4. 川越まちづくりの物語描写

（1）まちづくりを支えた町衆 可児一男氏

可児一男氏がまだ幼かった1940年代頃の一番街通りは、人通りが多く賑わっており、可児氏は「子どもの頃は、のんびりしてましたから、良い町でしたよ」と、当時の川越への郷愁を込めて語る。

しかし、その光景は、一番街の南に現在の川越駅が建設されたことを契機に一転する。1960年代半ばには一番街にあった大型商店が駅前へ移っていき、それに伴い町の賑わいも駅周辺へと移り、一番街周辺は徐々に衰退の一途をたどる。可児氏は、その頃の一番街通りの風景は、立ち並ぶ商店のシャッターは閉まり、車が通り過ぎるだけで歩行者がいない様な、“閑散たる状況”であったと当時を振り返る。

さらに1970年代には、蔵が生活にとって不便であることや、当時は洋風建築を建てる風潮にあったこと等を背景に、蔵の持ち主の変更や代替わりする際に、蔵の“取り壊し”が進んでいった。可児氏はそうした蔵が姿を消していったのは、川越に住まう人々が、その蔵の重要性に気付いていなかったことが原因なのではないかと振り返る。川越に住む人々にとって、蔵があることが当たり前であると同時に、何か古くさいものであるとすら認識していたのではないかという。今でこそ蔵は川越の町の財産だという認識が広まっているように思われるが、当時の人々にとっては特別なものでも何でもなかったのである。しかしそんな中、一番街通りが衰退し、昔ながらの蔵が姿を消していく事を住民は自然と受け入れているという状況に、可児氏は強い危機感を抱いていたという。

そんな危機感を抱いていた折、可児氏に、川越まちづくりに運命的に巻き込まれていく、小さなきっかけが訪れる。それは、川越市が受賞した、蔵造りのまちなみを保存する取り組みを記録した番組が「地方の時代映像祭」を受賞した折りに支給された“賞金”の使い道の相談を、川越市の植松氏から受けたことであった（このあたりの経緯については、次節の植松氏から伺った話を描写する際に、また改めて触れることとしたい）。この時、植松氏との相談の中で、これをきっかけに、数名の町衆と共に、蔵を保存することを目的とした「蔵の会」を設立しようじゃないかということになる。そして、その際、たまたま最年長者であった可児氏が、その初代会長を務めることとなったのである。

可児氏は蔵の会が設立以後、蔵の町並みを守り、そして改善していく様々な活動に精力的に尽力していくこととなる。勉強会を開き、プレーンストーミングを行い、素晴らしい町並みが余所にあると聞けば、現地

にいった視察を行う。そしてどうしたら町が活性化するかを皆で考えていった。当時は、皆が熱心に言いたいことを言って議論し合うような、活発な雰囲気だが、蔵の会にはあったのだという。

さて、そんな蔵の会の活動を進めるさなか、また次の大きな転機に向けてのきっかけが、可児氏に訪れる。ある時、可児氏は日経流通新聞の記事を見ていたとき、「コミュニティ・マート構想モデル事業」の存在を知ったのである。この事業は国の補助制度で、衰退しつつある旧来の商店街を暮らしの広場として整備・再生することを狙いとするもの¹⁰⁾であった。可児氏はこの事業を川越でも実現したいという思いを抱き、地元の代議士にすぐに相談したところ、その代議士は可児氏が、その事業の担当の通産省の大臣室に直接相談に行く機会を調整した。そして通産省の大臣室にて川越の状況を話し、事業の採択を訴えた結果、通産省は川越の活動に関心を抱き、その事業採択を決定することとなった。その話も通産省中小企業庁からトップダウンで埼玉県庁を経て、川越市役所に伝わり、各種の調整が図られ、最終的に事業決定に至ったのである。このコミュニティ・マート構想では、現在も川越のまちづくりににおいて大きな役割を担い続けている「町並み委員会」の設立や「町づくり規範」の作成へと繋がることとなる。また、川越の一番街通りの景観改善に大きく寄与した電線地中化についても言及されるものとなっていた。

この様に、可児氏が“偶然”にも、新聞でこの事業の存在を知ったということきっかけに、住民と行政（川越市）との町並み保全活動を活発化させ、町の活性化へと繋がっていったのである。ただし、それは一面において“偶然”であったとしても、反面においてそれは“必然”であったという事ができるであろう。蔵の会の設立とその会長就任の時と同じように、常に川越まちづくりにかける思いを常に携えていたからこそ、その偶然のチャンスを見逃さず、機を見て敏なる判断と行動に結びついたからに違いないからである。

さて、このコミュニティ・マート構想をきっかけに組織化されていった「町並み委員会」であるが、可児氏は現在でも、その委員長を務めている。この委員会では、同じく、コミュニティ・マート構想を契機に独自に作成された「町づくり規範」に則って、景観上の変更について助言、提案を行うものである。著者らは、そんな委員会に参加させてもらったことがある。委員会では、多様な論点が議論され、そして場合によっては、対立するような意見や議論がなされることもあるようであった。しかしそんな対立があっても、可児氏は、一つ一つの意見に丁寧に耳を傾け、皆の意見を一つの方向性にまとめているこうとする姿が印象的であった。様々な矛盾や問題の一つ一つを、丁寧に解きほぐしていくこうとする強い意志に基づいて、ねばり強い調整を長年にわたって図られてきたことが、町並み景観の整備、ひいてはまちづくり全体を支えてきたのだと、感じずにはいられなかった。町並み委員会に出席していたメンバーも、「この会も、このまちづくりの取り組みも、みんな可児さんがねばり強くやってきた事を知っている。可児さんがいれば、まとまらない様な話も、徐々にまとまっていくんです」と語っていた。

町衆のリーダー的存在として、皆の納得を少しずつ少しずつ引き出し、まちづくりを一步一步前に進めてきた可児氏——、この人物の周りの人々を引きつける真摯な真剣さ、そしてそれに裏打ちされた魅力とカリスマ性なくして、今の川越は今の川越たり得なかったに違いない。

（2）町衆として役所勤めを果たす 植松久夫氏

幼少の頃（1960年当時）に東京から川越に引っ越してきた植松久夫氏は、当時の一番街商店街の寂れた風景を目にして面白みのない町のように感じたようである。そういう第一印象のせいもあるのだろう、若い頃は川越に対する関心はずっと薄かったとのことである。しかし、縁あって川越市役所で勤めるようになって以降、仕事を通じて出会った一番街の人々の熱意に心を動かされ、川越を良い町にしていきたいという思

いを次第に強めていくこととなる。

植松氏が市で勤め出してしばらく経った 1981 年に、市は蔵造り商家を文化財に指定したことを受け、その取り組みを紹介する番組を市が作成した。植松氏もその作成に携わったこの番組は、全国から各地域の取り組みの映像が寄せられる「地方の時代映像祭」にて、賞を受賞するという幸運に恵まれた。この時、「賞金」が出されたのだが、その使い道が議論となった。市では賞金を「雑収入」に充てようという考えがあったが、植松氏は、せっかく蔵造りの番組に対して賞金をもらったのだから、蔵の保存に取り組んできた地元の方々に還元すべきだと主張した。そして、賞金の受け皿となる組織を作るため、のちの「蔵の会」設立を、可児氏をはじめとした地元の方々と検討することとなった。

植松氏がこの時蔵の会を設立する方向へと調整を図った背景には、当時一番街周辺で起こったマンション建設問題があった。蔵の保存を訴える周辺住民はそのマンション建設に反対したものの、結局建設されることとなってしまった。植松氏はこの時、マンション建設を阻止することが出来ずに挫折感を感じていた住民に、もう一度頑張ろうと声をかけたという思いがあったそうである。そして、その思いに、一人の町衆として川越の行く末を憂いていた可児氏が応えることとなったのである。

この蔵の会の設立が、その後の川越のまちづくりの展開を決定づけていった大きな転機であったのは、先の章に描写した通りである。つまり、「もらった賞金を何とかする」という小さなきっかけが、植松氏と可児氏の共同作業をもたらし、それが、今の川越のまちの有り様に重大な影響を与えることとなったのである。

この蔵の会において植松氏は、日中の市の業務を終えてから活動に携わっていく。つまり、植松氏にとって蔵の会の取り組みは、市の職員としての活動ではなく、あくまでも植松氏一個人、一人の「町衆」の活動であったのである。ただし、植松氏はそうした「一人の町衆としての思い」を胸に秘めつつ、現実の業務の中では、その思いを実現するために求められる「行政官」として自分の責務を果たそうと画策する。

そうした言わば“半官半民”の活動姿勢は、植松氏のまちづくり活動の理念にも表れている。植松氏は、持続的な町並み保存運動を展開するには次の3点が重要となるということを貫いて認識し、主張し続けているという。第1にまちづくりは住民主体でなければならない、第2に町並み景観の保存はただ単に保存だけを目的としてはならない、商業活性化を前提としてそれを通して結果として町並み景観が保全されるよう目指さなければならない、そして第3に、そうしたまちづくりを展開するための基盤として財団の設立が必要である、という3点である。

こうした認識は、「川越のまち」に対する真摯なる町衆としての深く熱い思いの下、その思いを実現するために必要な条件を行政官として考えるという姿勢あつてのことだと言えるだろう。そして、蔵や町並みが専門家にとって如何に文化的な意義の高いものであっても、そこに住まう川越の住民が、その保全に主体的に関わらない限り、それが長きにわたって保存されていくことなどあり得ないであろうという重要な認識に辿り着いたのである。また、住民がそれに主体的に関わるためには、ただ単に「観光を重視する」という目的や「文化財は大切だ」という理念を掲げるだけでは、川越の人々の心が動かされることはない、という点にも、思いが至ることとなったのである。

こうした発想は、ただ単に、川越の街を残したいと考えるだけではない。なかなか生まれるものではないだろう。あくまでも行政官として“落としどころ”を探りつつ、ねばり強く、具体的にまちづくりを進めるという冷静な客観認識があつてはじめて、こうした理念提唱に結びついたことができるだろう。そして、こうした植松氏の思いが実際のかたちへと結びつくようにして、蔵の会の設立を通じてはじめて、蔵の保存に向けた運動の先頭に行政や部外の専門家ではなく「商店街の人々」が立つこととなったのである。

さて、蔵の会設立後に行われたコミュニティ・マート構想モデル事業では、一番街通りの電線地中化が検討されていたが、事業が進まない状況がしばらく続いていた。そんな折、埼玉県から川越市に古くなった一番街通りの下水管工事の管理要請があり、県道を市が管理するという機会が巡ってきた。その際、電線地中化を行うには絶好のチャンスと感じた植松氏は、この機会を逃すまいと、関係事業者とともに電線地中化を検討する。この時、植松氏が市の道路管理課で働いており、道路占用許可を取りに来る東京電力やNTTの方々と人間関係を築いていたことが、協議会の設立や議論の円滑化に大いに役立つこととなる。さらに、電線を地中化するにあたって、キュービクルの置き場を民地に提供してもらう必要があったが、ここでも植松氏の住民との人脈が活き、住民の協力を得ながら、最終的に電線地中化事業が完成する。

このように、一番街通りの電線地中化が実現する背景には、植松氏の欠くべからざる貢献があつたものと言える。植松氏は「たまたまそういう時期にタイミング良く…あちこちをくつつけて合わせるようなポジションにいた」と語っておられたが、この事業は、植松氏がより良いまちづくりを実現するために、来るべき「タイミング」を待ち“機を見て敏”に行動した結果、成しえたものだったと言えるだろう。

その後、川越市は蔵造りの町並みを守るために、伝建地区の指定を目指す（このあたりについては、佐々木氏からのお話しの物語描写において詳しく述べることにしたい）、ここでも、植松氏が住民との協議において積極的な役割を担うこととなる。伝建地区の指定を受けるためには各々の地権者の同意が必要であつたが、地権者の同意を得るために地域をまわったそうである。植松氏が住民と密な協力関係を築いていたからこそ、折衝を行うことができたのである。

蔵の会の設立、電柱の地中化、そして、伝統地区指定といった、川越まちづくりにおける重要なそれぞれのターニングポイントにおいて、“一人の町衆”として“行政官”の職責にあつた植松氏は、決定的に重要な役割を担ったのである。町衆としての思いを持って、行政官として、行政と住民を繋ぐ各種の調整を図る役割を果たしてきたのである。こうした町衆としての行政官、植松氏の働きなくして、今の川越のまちは、今の川越たり得なかったに違いない。

（3）川越の町並みを見守り続ける専門家 福川裕一氏

福川裕一氏が川越に関わるようになったのは、学生時代に川越を題材にしたコンペに応募したことがきっかけであった。当時、蔵造りの保存や伝統的な町並みを見直す傾向が強まり、学識者によって蔵造りの保存が提唱されていた。その後、福川氏は川越のまちづくりに専門家（大学の先生）として関わっていくことになる。

福川氏が初めて仕事として川越に関わったのは、1980年から1982年に川越の町並みを対象に行われた「デザインコード調査」の時である。この調査では、福川氏自身、住民の家を一軒一軒尋ねていき、町並みの設計指針を決定していった。この時作成された「川越の町並みとデザインコード」は、結果的には住民の目に触れる機会がほとんど無く“お蔵入り”となるが、この調査を通じて福川氏は、川越のまちは磨けばもっと良い町になるとの思いを強めていくこととなる。このデザインコード調査の経験が、その後の「コミュニティ・マート構想」や「町づくり規範」の策定に活かされていくこととなるのである。

しかし、デザインコード調査が川越市が主導で行ったものであり、当時はまだ行政と住民との間に活発な交流はなかったそうである。福川氏自身も、デザインコード調査の時には、市全体として積極的に取り組む姿勢が見られず、少なからず不満を感じていたようである。

そんな中、一つの転機が訪れる。可児氏と植松氏らとの出会いである。福川氏は、当時積極的に川越のまちづくりに取り組んでいた植松氏に誘われる形で「蔵の会」に参加することとなり、可児氏をはじめ、住民や

市職員等との交流を深め、彼らとともに川越の町並み整備を進めていくこととなる。ここから、「コミュニティ・マート構想」、「町づくり規範」をはじめ、川越のまちづくり活動が活発化していくこととなる。

コミュニティ・マート構想事業では、福川氏自身、週に何度も川越に足を運び、夜遅くまで話し合いを続けていたとのことである。この事業について福川氏は「商店街を先に活性化しなければ町並みは守れない…それが基本ですよ」というように、蔵造りの町並みを保存すること以前に、まず川越に住まう人々の生活や商売に配慮することが重要であると強く認識されていたようである。この視点は、ただ単に“外部”から川越と関わっているだけでは見え難い点であり、川越に住まう人々との密接な交流を深めていたからこそ、こうした認識がそこに実感を伴う形で可能となったのではないと思われる。そしてこれは、蔵の会設立の際に掲げられた植松氏の思想につながる、町の一つのアイデンティティと化していったといえる。

その後、「蔵の会」を中心に川越のまちづくりや蔵の保存に向けて活動する中で育まれてきた思想や考えを規範として定めていくために、福川氏が中心となって「町づくり規範」が検討、策定された。この規範は、人々の活動を強制的に“規制”しようとするものではなく、川越のまちにもともと備わる固有の価値を活かしつつ、人々がお互いに協力する中で、全体として価値の高いものが醸成されていくということにその狙いがあった。こうした特徴を持つ「町づくり規範」は、住民や商店に無理な規制を課すものではなく、彼らからも大変喜ばれたそうである。

ただ、そうした内容ゆえに規範を順守しない者もいるようである。古い建物は残せばいいが、新しく建てるもののデザインについては「意見も分かれるし、何が良いかこっちもわかんないこといっぱいだし…試行錯誤ですね」と、福川氏は町並み保全の難しさを語る。実際に、「安易なものを造るどころかものにならない」と語られ、周囲の蔵のようにただ黒く塗ればよいなどという表層的な議論にとどまり、似非蔵造りが建てられている現状を問題視されていた。こうした町並み景観についての議論やアドバイスを、「町並み委員会」やその他の蔵の保存活動の中で重ね、現在に至るまで伝統的な蔵造りの町並みを守ってきたのである。

こうした活動により、福川氏は住民との信頼関係を築いていき、まちづくりの専門家からの意見を住民と共有していった。そして、当初は蔵に対してネガティブな印象を持っていた住民が少なくなかった中で、蔵を保存しなければならないという認識が住民の間でも芽生え、まちづくり運動の発展へと繋がっていったのである。

その後、伝建地区指定に向けて調査や事業が行われていくが（このあたりについては、佐々木氏からのお話しの物語描写において詳しく述べることにしたい）、その中で、一番街通りは道路幅が都市計画決定されていたため、現状の蔵を残すために、部分的に道路幅員を縮小変更する「へび玉道路」¹⁾という案が発表された。この案を聞いた福川氏は、蔵の町並みのファサードはそろえるべきだと主張された。町並み委員会での蔵に対する建築指導や町並み全体の景観について考えてこられた福川氏は、生半可な対策では意味がないと認識されていたのだと言えるだろう。妥協を許さないこの精神が福川氏の原動力となり、専門家としてのその精神に住民が感じ入り、住民とのまちづくり活動や信頼関係を深めていくことにつながったのであろう。

このように、福川氏の町並み景観に対する専門家としてのこだわり、そして、根気強くまちづくりに取り組む姿勢が、川越のまちづくり全体の活動を支え、町並みを守ってきたのである。この福川氏の尽力無くして、現在の古き良き川越の町並みは生まれ得なかったであろう。

（４）伝建地区指定を陰で支えた専門家 佐々木政雄氏

佐々木政雄氏は、川越に関わる以前から、山口県萩市や他都市の歴史的地区の交通計画等に携わってきた人物であり、日本の都市計画を発展

させなければならないという意志を持ち、歴史・伝統を重んじる交通計画について模索されてきた。そんな中、植松氏を含む川越市の担当者が一番街の都市計画道路変更について相談に来られたのが、川越に関わるきっかけであった。

植松氏らが佐々木氏の下に相談に訪れたのは、当時の川越において、蔵の町並みの保全と都市計画決定とが互いに整合しておらず、いかに対処すべきが苦慮していたためである。前述したコミュニティ・マート構想事業では、その補助金を一番街通りの蔵の保存に充てる予定であった。しかし、もともと一番街通りは道路幅が都市計画決定されており、その計画が実行されれば蔵は取り壊されることになっていたため、将来壊される蔵に補助金を充てることは当初許可されなかった。こうした背景から、蔵の町並みを残すためには、都市計画の変更が必要であったのである。それと同時に、現状のままではマンション建設等によって歴史的な景観が損なわれる危険性があり、そうした問題に対処すべく、伝建地区指定の必要性が議論されていた。こうしたいくつかの問題を抱えながら、町並み保存をしていくために、川越市の担当者が文化庁の伝建地区の担当官のもとへ相談に訪れたところ、文化庁の担当官が、萩市の歴史的地区における街路整備とともに仕事をされていた佐々木氏を紹介され、植松氏ら市の担当者が佐々木氏のもとを訪れることになったのである。

佐々木氏は相談を受けて、都市計画道路の変更をしないとイケないのならば、建設省の歴みち事業（歴史的地区環境整備街路事業）調査費をもらって、町並み保存のために必要な調査をし、都市計画変更ができる環境を整えていかないとイケないと助言した。この助言に基づいて、1986年「歴みち調査」が行われることとなった。

その後、「歴みち調査」に続く形で、1990年「川越市歴史的地区整備に関する調査」が行われたが、ここでも佐々木氏が中心となって、文化庁や建設省をはじめ関係機関の調整が図られた。特に、本調査に建設省の方にも参加してもらうことで、川越の都市計画について建設省がサポートしているということを意図することで、事業が円滑に進むようにしていた。こうした佐々木氏の着実に歩を進めていくような戦略があったからこそ、川越一番街の都市計画変更が大きく進展していったという事実があった。こうした尽力の結果、遂に1999年に伝建地区指定と、一番街通りの縮小変更およびバイパス計画を含む都市計画変更が実現するに至ったのである。

ここで、伝建地区のような歴史的な町並みを守るということは当然必要なことであるが、町並み保存だけ考えていたのでは、例えば町中を車が多く行き交うような風景になってしまうという問題が潜んでいる。佐々木氏も「都市計画道路の変更は、交通計画的な事をしっかりとやらないと、結局町並みを残せ残せと言っても」実現されないと語る。こうしたことから、町並み保存と交通はセットで考えなければならないという問題意識を、建設省と文化庁の各担当官が共有され、問題解決に向けて協力しながら萩市や川越市の取り組みを続けてこられた。この事が、川越の蔵が都市計画変更による消滅を免れた一つの要因であった。そして何よりも、佐々木氏が川越の伝建地区指定に向けて、建設省と文化庁、有識者を結びつけ、その橋渡し役として尽力されたことが、伝建地区指定に至った大きな鍵であったことは間違いない。

この佐々木氏の川越での活動は、地元の方々は知る事がほとんど無い都市計画に関わる取り組みであったが、地元の町並み保存に向けた活動の裏でなされた功績は大きく、行政でも町衆でも大学関係者でもない、影の立て役者として尽力されたのである。そして、専門家として仕事に向き合ってこられる中で、様々な人間関係を築き上げ、それがその町の歴史的町並みの保存に大きく貢献しており、現場の心意気に佐々木氏自身も感じ入っているからこそ、これまで仕事を続けてこられたと考えられる。こうした佐々木氏の尽力無くして、伝建地区指定などの都市計画の問題解決、およびその後のまちづくりの展開は無かったといっても過

言ではない。

5. 川越のまちづくりの解釈学的考察

前章で述べた物語描写を踏まえ、川越においてどのようにしてまちづくりが大きく発展を遂げたかについて、物語を再解釈することを通じて理解し、今後のまちづくりの方向性を探るための考察を行う。

これまで述べてきたように、川越のまちづくりは各主体が相互に、直接・間接的に連携しあって進めてきたものであり、単純に各主体が個別的に尽力した結果「川越まちづくり」が成功したのではないのである。

その中で、可児氏は、蔵の会会長や町並み委員会委員長として全員の意見をまとめながら、懸命にまちづくり活動に携わってきたことで、多くの人々の熱意を喚起し、そうしたカリスマ性がまちづくりを成功へと導いていくきっかけになったといえる。また、行政官であった植松氏は、住民からの信頼を受けると同時にそれに刺激されながら、蔵の町並みを守るため、市の業務だけでなく町衆としての役目も果たしてきた。特に、商売を活性化しながら町並みを守るという、生活に根差した景観保全に取り組もうとしたその思想が、その後現在に至る川越の姿をつくり上げたといっても過言ではない。こうした、「社会や文化を創造してきた」生業の必要性は、民俗学の実践的研究でも示唆されているものである⁹⁾。

そして、可児氏、植松氏ともに、様々な事業を行うにあたって「タイミングを見失わなかったこと」が、大きな成功の鍵となっていることがわかる。こうした大局を読む力“大局観”が優れており、“機を見て敏”に行動をなしていったということが、まちづくりにおいて重要なポイントである。

こうした地域の主体となる住民や行政だけでなく、福川氏や佐々木氏など、川越の外部の人間が川越のまちを改めて評価し、良い町にしたいという思いで、専門家として地元の住民では気づかないような部分の調整を図った事も、川越の成功要因の一つである。特に町づくり規範の策定に尽力した福川氏のように、蔵造りの町並みに対する妥協することのないこだわりをもって、景観整備のための指導を続けてきたことが、現在の伝統的な川越の町並みを守ってきたのである。また、伝建地区指定における都市計画道路変更の問題では、影響範囲が広く、様々な利害関係者との調整を必要とするため、佐々木氏が行ったように国のサポートを取り込んでいくことが、まちづくりを進展させる上で重要となる。

以上に述べたように、「川越まちづくり」の成功の背景には、川越のまちを良くしたいとの可児氏の熱意と確固たるリーダーシップがあり、それに牽引される形で、住民自らが主体的、自律的にまちづくりに尽力してきた

のである。そして、そうした住民の自律的活動が、一人よがりに墮することなく、持続的に展開してきたのは、行政の受け皿が適切に整えられていたためであり、そうしたことが可能であったのも、植松氏をはじめとする行政官が“半官半民”の姿勢で住民の生活を理解し、住民の活動を支援してきたからこそであると言える。さらには、福川氏、佐々木氏をはじめとする専門家が、あくまで“外部”の立場に身を置きながらも、川越の取り組みに関わることで、専門的な判断やより視野の広い判断が可能となるとともに、そうした方々の調整により、川越の問題が地域内部で閉じることなく、国や各関係省庁との円滑な連携が図られたものと言える。

この様に、「川越まちづくり」の取り組みでは、可児氏、植松氏、福川氏、佐々木氏らの尽力の下、住民と行政、住民と専門家、地域と国家等、川越に関わる様々な関係者・関係組織の間で適切なバランスが保たれ、それらがお互いに協働・連携する中で、“蔵造りの町並みを守る”というヴィジョンが共有され、まちづくり活動が展開していったものと考えられる。ある要因が新たな要素を生み出していくというように、それぞれの要因が相互に関連しあって、都市が発展してきたのである。

謝辞

インタビューをお引き受け頂きました可児一男氏、植松久生氏、福川裕一氏、佐々木政雄氏の各氏より、これまでのご経験について大変熱心にご教示頂きました。各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意を表します。

脚注

[1] もちろん、異なる時刻において異なる物語の中を生きることはできるのであり、その意味において様々な解釈を「比較」することを通じて、より高次の一般的解釈を得ることが可能となる（例えば、羽鳥・藤井、2010など）。しかし、本文で論じているように、解釈学的方法にて一般的了解を得ようとするには、自然科学的アプローチのように複数データを“同時”に分析することは原理的にできないのである。

参考文献

- 1) ディルタイ（著）久野昭（訳）：解釈学の成立、以文社、1981。
- 2) E.Mankowski. & J.Rappaport: Stories, Identity, and the Psychological Sense of Community, Knowledge and Memory: The Real Story, Lawrence Erlbaum Assoc Inc, 211-226, 1995.
- 3) 後藤春彦、佐久間康富、田口太郎：まちづくりオーラルヒストリー、水曜社、2005。
- 4) 服部敏也：PRI Review No.36 オーラルヒストリーの勧め、国土交通省国土交通政策研究所、2010。
- 5) 山下裕作：実践の民俗学、農村漁村文化協会、2008。
- 6) Esplanade No.50 住民の主体性を取り込んだまちづくり 埼玉県川越市、INAX、1999。
- 7) 川越市：川越市入込観光客数、2010。
- 8) 藤井聡：景観改善の「物語」とその「伝染」について、都市計画、57(6)、pp. 21-24、2008。
- 9) 浅野智彦：自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ、頸草書房、2001。
- 10) 鎌田薫、福川裕一（研究者）：NIRA 研究叢書 実践的「町づくり規範」の研究・川越の試み、(株)地区計画コンサルタンツ、1988。
- 11) 新谷洋二（編著）：歴史を未来につなぐ まちづくり・みちづくり、学芸出版社、2006。